

編集後記

あらためて一号から四号までの目次を眺めなおすと驚嘆します。こんなにも様々な方々が寄稿してくださった事実。一人ひとりのお顔が目には浮かびます。多彩です。

皆さん人生をやって来た喜びと悲しみとユーモア。吉澤編集長のWEB版ベクトルが成功しました。バックナンバーの閲覧が可能。■そして新しい仲間が増えると同時に、国際色も豊かになってきました。過ぎていく歳月の流れに竿さして、人生の豊かさを味わう試みの一つが成功しています。■『六本木の思い出』を書き継いでいる人、『池畔百吟』を奥の小箱から出してくれた人、そして『二十四の瞳』を露語に翻訳してくれたベラルーシの若人たち。こんな小さな雑誌「水源地」が元気の源になるなんて、編集委員は予想もしていませんでした。■創刊号の編集後記に書きました。「人との出会いとは不思議なものだ。永眠した人がずっと生きていく」と。なかなかお会いできない人たちが、異国の人たちも、この文集でお会いできれば、髣髴と生き生きと眼前に現れてくれるのです。いつも。(粕谷)

☆☆☆☆

本誌前号発行から八か月余経ったが、残念ながらウクライナでの戦火が止まない。本年八月一日にニューヨークタイムズ電子版は戦死者・ウ軍約七万人、口軍約一二万人、負傷者・ウ軍一〇〇一二万人、口軍一七〇一八万人と発表した(米政府提供)。九月二十九日には

ウ軍参謀本部は口軍戦死者が二七万七六六〇人に上ると公表した。数字の真偽はともかくとして、今、ウ・ロ双方でどんなにか多くの家族がつらい思いに耐えていることか。「兄弟殺し」という声もある。もう戦争は一刻も早くやめるべきだ。■そんな中、一九六七年から五六年間存続してきた札幌大学ロシア語専攻(旧「ロシア語学科」)が来年度から学生募集を停止すると公表した(同大学HP本年四月七日付)。「近年、入学者の減少傾向が続いていることから、大変残念ではあります。この度の結論に至りました」とのこと。■私は同学科OBの一人として甚だ腑に落ちない思いだ。「減少傾向が続いている」というが、では一体「大学として」ロシア語専攻存続のためにどういう努力を重ねてきたのか。近い将来の日口間の「戦後」関係のより良い発展を築くためにも(ロシア語教員育成事業をも含め)この専攻をつぶすなかれと言いたい。(村野)

☆☆☆☆

本誌発刊の言い出しっぺも実行部隊も老人ばかりだから、寄稿者も高齢者に偏りがちだが、質の高まりとともに、若い方からの寄稿も得られるようになった。これは大変有難いことである。また、ベラルーシの辰巳氏のご協力も貴重である。■わら半紙の回覧雑誌をつくるようなつもりでスタートした本誌だが、ネットを利用することで読者層を拡げ、思わぬ発展を遂げたことは望外の成果だと言ってよいだろう。(吉澤)

水源地 第五号

発行 二〇二三年十月十六日

編集 水源地編集委員会

発行者 粕谷 隆夫

〒三〇〇―二七四一

茨城県常総市国生一三八〇番地

電話 〇二九七―四二一〇六二五